

# たったひとつの、ねがい。

付き合い始めてもう4、5年になる彼女。思い切ってプロポーズしてみたところ、彼女は意地悪くにやつきながら頷いてくれた。やった！——次の瞬間、彼女が殴られた。通りすがりの男に。俺も殴り倒された。訳のわからないまま。俺も彼女も連れ去られる。連れ去られた先は古いお屋敷。目の前には4人の老人たち。俺たちをどうするつもりだ。「え？ ああ、食うんだよ。」

物語はこのような衝撃的な展開で幕を開ける。プロローグでは、「俺」と「俺」の彼女との幸せな生活が一転、理解不能な、不幸とも形容し難い不幸がおとずれる。

プロローグの後は主人公の復讐劇が描かれる。偶然屋敷が放火魔による火事に見舞われたことで何とか逃亡した主人公であったが、後遺症で右腕以外の四肢が機能なくなり、そして何より、最愛の彼女を失ってしまう。絶望が渦巻く中、それでも主人公は、彼女との幸せを奪った「やつら」への復讐だけを希望に、どこへでも行ける足と「やつら」を殺せる腕を得るためリハビリを始める。ハンディキャップを持った自分がどうすれば「やつら」を殺せるか、考え、努力し、実行していく。

これだけ突飛かつ凄惨な設定を掲げておきながら、物語はまるでそれが正常であるかのように淀みなく進んでいく。老人たちはカラスがゴミ袋をつつくように彼女を食べるし、主人公は蚊を叩き殺すように「やつら」を殺していく。そこには何の迷いや躊躇も見られず、物語全体を通して行き過ぎた復讐劇の描写が目立つきらいがあることも確かだ。しかし、多くの読者は「最愛の彼女を食われた」という悲劇に見舞われた「俺」への感情移入を避けられず、描かれる復讐劇に爽快感すら覚えることだろう。そのような形で人の普遍的ないやしや卑しさをえぐるように描いている点で、この作品は極めて「人間的」と言いたい。

また、この作品の一番面白い点は、読者の思い込みが物語の展開を作り上げていくところだ。しかも、この思い込みは、おそらくどの読者にも避けられない。エピソードで明かされる物語の真相に、誰もが必ず驚愕する。果たしてこの物語が詠うは届かぬ悲願か、底知れぬ絶望か、煮えたぎる憎悪か。いや、物語を読破した者はこう言うだろう——

「この物語に、  
同情の余地なんかない。」



『たったひとつの、ねがい。』

作者：人間人間

発行：アスキー・メディアワークス

定価：¥530 (税別)